

Title	プルデンティウス『ペリストファノン』における弁舌について
Sub Title	Lingua in Prudentius's Peristephanon
Author	鎌田, 伊知郎(Kamata, Ichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1997
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.66, No.3 (1997. 3) ,p.25(345)- 46(366)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19970300-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

プルデンティウス『ペリステファノン』における弁舌について

鎌田伊知郎

はじめに

西方ラテン世界において一世紀半ば以降に輩出した優れたキリスト教著作家たちには、古典古代的（異教的）教養をキリスト教に敵対するものと捉える傾向が見られた。しかし、四世紀に入り、ミラノ勅令（三一三年）によりローマ帝国がキリスト教との敵対関係を解消する頃には、キリスト教徒の古典古代的教養に対する態度にも変化が生じていた。ローマ帝国のみならず、古典古代的教養をもキリスト教化し、独自のキリスト教的教養を形成しようとする動きが本格化したのである。古典古代的教養の積極的活用を主張したヒエロニムス（Hieronymus, 三四七頃—四一九／二〇）の『書簡』七〇がその端的な一例であろう。かれは二章

において「言葉使い（弁舌）に魅了され」「異教的な知識を」活用しようとしたことを、「捕虜となつた婢」を、その「美しい肢体に魅せられて」⁽²⁾「イスラエルの民に変えよう」と望むことに比している。つまり、弁舌に魅惑され異教的な知識をわがものとすることが、キリスト教徒による古典古代的教養の摂取なのである。しかし直接摂取することはできないとヒエロニムスは主張する。

「婢の中に潜む偶像崇拜、快樂、誤謬、欲望がもたらす滅びを、悉く切り落とし剃り落とし」、「(婢の) 純潔となつた肉体と交わり、婢から家の奴隸を万軍の主のために生み出す」と語り、活用に際しては徹底的な批判が必要であることを示している。また『書簡』二二の二九章では「光」「キリスト」「詩篇」「福音書」「使徒」と「闇」「悪魔」「ホラティウス」「ウエルギリウス」「キケ

口」を対比し、前者を「キリストの杯」、後者を「悪魔の杯」と断定し、両者を同時に飲むことを禁じている。古典古代的教養への安易な傾斜に対しては激烈な非難を浴びせかけるのである。⁽³⁾

本稿で取り扱う古代末期最大のラテン・キリスト教詩人アウレリウス・プルデンティウス・クレメンス(⁴)は、(Aurelius Prudentius Clemens,三四八—四〇五?)は、ヒエロニムスと同時代のヒスピニア生まれの教養人である。かれは晩年に至り、古典古代的教養に埋没した自身の生を魂の救いという観点から厳しく批判し、詩作に専念するようになり以下の諸作品を著した。讃歌としては、様々な日時において神を讃美する『カテメリノン Cathemerinon』(日々の賛歌)と殉教者及び使徒を讃える『ペリステファノン Peristephanon』(栄光の冠)がある。教訓詩としては、全能の神であるキリストの受肉と救済を論ずる『アポテオシス Apotheosis』(崇神)、墮落した魂の惨状と本性を示す『ハマルティゲニア Hamartigenia』(罪惡の源)、さらに魂における徳と悪徳との激闘を描く『 psychomachia Psychomachia』(靈魂の戦い)がある。護教詩としては、異教徒シュンマクスに反論しキリストがローマを導いていることを訴える

『シュンマクス駁論 Contra Symmachum』がある。これらに『序 Praefatio』及び『跋 Epilogus』と、新旧約聖書中の様々な場面を描き出す『ディットカエオン Dittachaon』(二重の食物)が残されている。諸作品の名称から、プルデンティウスが詩作の題材として、キリスト教の教えと諸聖人の生死を用いていたことが窺えるであろう。

本稿では、古典古代的教養への批判と活用が交錯しながら展開するキリスト教的教養形成において、プルデンティウスが弁舌をいかに位置づけているのかを、検討することを目的とする。古典古代的教養の基幹部をなしている弁舌を、どのようにしてかれがキリスト教的教養形成の基礎に据え直したかが問題となるであろう。

『ペリステファノン』は、迫害が終了しほぼ一世紀が経過した時点で、奇跡、天使及び神の働きを加え、殉教者の英雄的な死を描出した讃歌である。殉教者は異教祭儀を拒絶し、魂をこの世から、自己の肉体からも解放しようとする。つまり罪惡からの完全な解放を希求するのである。その際、弁舌は悪徳として否定されるのである。一四を数える讃歌中、殉教者の弁舌の働きが大きく扱われている、第一三歌及び第一〇歌を取り上げることとする。

一 『ペリステファン』第一三歌

『ペリステファン』第一三歌は全体で一〇六行⁽⁶⁾から成り、二五八年に殉教を遂げたカルタゴの司教キユブリアヌスを描いている。キリストにより放縱な生活から脱し、司教となり迫害にあたつては、弁舌をもつて信徒を殉教に導き、自らも死を遂げる所以ある。キュプリアヌスの弁舌はどのように捉えられているのであろうか。

殉教者は祖国に忠実だが、愛と口により私たちのものなのだ。

アフリカには血が残り、舌は至る所で力を揮う。

肉体の中で舌だけが生き残り死を知らない。

キリストが、人類の存在と世界の存続を認めて下さる限りは。(二一六行)⁽⁷⁾

殉教者の舌は極めて高い評価を受けている。では、今なお力を揮い死を知らないと言われる弁舌はどのような働きをなすのであろうか。

神のかの靈は、創造者により預言者たちに注ぎ込ま

ブルデンティウス『ペリステファン』における弁舌について

れた。

天上から送られて、溢れる雄弁の泉であなたを浸したのだ。

おお、雪より清い舌よ、おお、前代未聞の味覚！

神酒が心を和ませるように口蓋を浸し

魂の座を貫き靈を暖め、四肢を巡る。

神を(体内)深くに感ずるようになる。體に入つているかのようだ。

教えて下さい、父よ、どこから地上に突然幸いをもたらされたのかを。

使徒たちの著作には力強い解釈者がいなかつた。

そこで豊穣な雄弁が選ばれたのだ。全地に教え

パウロの著作に仕え、説き明かす。

すると粗野な人心が洗練されて

恐るべき業とキリストの深遠な神秘がよくわかるようになるのだ。(九一〇行)⁽⁸⁾

九一〇行では弁舌(雄弁)は、神の靈が人間に注ぎ込まれることにより生ずることを示している。続く一一一四行では弁舌が人間にもたらす絶大な効能を述べて

いる。神の働きを受け、舌は魂及び肉体の奥底に働きか

ける。すると人心は洗練され「恐るべき業とキリストの深遠な神秘」を理解するに至るのである。キユプリアヌ

スの弁舌は、聴衆の魂及び肉体に大きな変化を引き起こし、頽落した魂をキリストに目覚めさせるのである。では、弁舌を揮うキユプリアヌスの魂はいかなる状態にあるのであろうか。

しかし突然キリストが放縱の猛威を抑え
心から闇を追い散らし狂気を追放した。

キリストの愛で満たし信仰と己⁽⁹⁾が行状への羞恥を与えた。（二五七—二七行）

キリストがキユプリアヌスの心から狂気を除き、かわりにキリストの愛で満たし信仰と慎みを確立させる。すると風貌、行動に変化が見られるようになるのである。

（キユプリアヌスは）顔、姿が以前と違つた。
面から浮ついた表情が失せ、真剣な顔つきとなつた。
流れる頭髪は短く刈り込まれ
神は勇敢な者に尽きぬ未来を与えて下さる。
苦難を代価として光への希望と永遠の日は贖われる。
全て惡は飛び行く時と共に、素早く過ぎ去る。
大したことはない。終わりがあり、憩いがくるのだから。

私は輝かしい死の先鋒、流血（殉教）の導き手となる。
進んで頭を剣の下に差し出し、血を捧げよう。
魂をキリストに結ぼうと思う者は、（キリストと）
真摯な事柄を語り、希望を求め、定めを守り
キリストの正義に生き、われわれの教えを究めるの

だ。（二一八—三二二行⁽¹⁰⁾）

魂はキリストによつて変容し、新たな生き方が始められたのである。そしてこのような「善行」（二二二行）の結果、キユプリアヌスは「司教の座にまで導かれ」（三四四行）たのである。迫害が起ころ（二五七—三七行）とキユプリアヌスは、教えをもつて人々の「魂を奮い立たせ」（二二八行）るようになる。かれは以下のようない言葉を人々に向けたのである。

(キユープリアヌスは) こう言い、人々の心をキリストに燃え立たせ備えをした。 (四一~四九行)⁽¹¹⁾

四一~四五行では、苦難、悪、飛び行く時という動搖し経過するものと、尽きぬ未来、光への希望⁽¹²⁾、永遠の日、終わり、憩いという堅固で安定したものが対比される。前者の渦中にある人間に後者の価値を認識させようとして、キユーピアヌスは弁舌を揮つてゐるのである。

認識は、殉教の実践に直結している。続く四六~四九行ではキユーピアヌスは、自身が殉教の先鋒として真先に血を捧げる決意を示し、殉教こそ魂をキリストに結びつける道であることを強調している。殉教へ邁進する者が、殉教を勧める弁舌を揮うのである。さらに、キユーピアヌスは「真先に捕らえられ」(五一行)、「地獄の闇を知り、太陽から見捨てられた」(五二行) 墓穴に閉じ込められ、「至高の父の名を呼ぶ」(五六行) のである。かれは、単に父に向かつて声を上げてゐるのではない。滔々と弁舌を揮うのである。

「キリストの父なる全能の神、世界の創造者

キリストよ、人類の父、人類を愛し滅びるままにさ

プルデンティウス『ペリステファノン』における弁舌について

せぬ方。

蛇の毒に塗れ様々な罪に染まつてゐた、あの私を優しいあなたは哀れみ清めて下さいました。

あなたのものとなるよう命じられ、私は別のキユーピアヌスとなりました。

古い人から新しい人となりました。もう以前のような罪人ではありません。

汚れた心を快く清めて下さつたのなら
今度は闇を払いのけ、暗い獄舎をご覧下さい。

肉体の牢獄から、この世の鎖から
この魂を引き抜いて下さい。私に血を注がせあなたに捧げさせて下さい。

凶暴な裁判官を無情にし、迫害者の怨念が和らぐことも

(私に殉教の) 栄光を拒まむこともないようにして下さい。

私が統べたあなたの民の中に、無為な者などでませんように。

刑罰に耐えられず脱落する者、取り乱す者などいませんように。

ひとりも欠けずに全員お返しできますように。」

(五五〇六九行)¹³

坑の脇には、配置された祭壇が立っていたと言わ
れている。

以下のような定めのもとに。キリスト教徒は一握の
塩と豚の肝臓を捧げるか

五九行では、自身に及んだキリストの働きを二つ述べて
いる。第一の働きは魂における悪徳の除去であり、第二
の働きはキリストのものとして相応しい実践の要求であ
る。キユプリアヌスは人間に向けられたキリストの要求
を実現すべく、キリストに自身及び信徒の魂を、肉体か
ら解放するよう願うのである。キリストに向けられた祈
願は、傲慢な弁舌として斥けられるのであろうか。

(キユプリアヌスは) これらの声で主を動かした。
すると聖靈が、勇猛にさせようとカルタゴの民の中
に流れ込み
心を鼓舞し燃え立たせ

流血の最期で無上の誉れを求めさせる。
慌てずたじろがず、苦痛に負けずに

栄光を激望し、キリストを渴望し信仰を守るように
と教える。

……(中略)……

一一 『ペリステファノン』第一〇歌

『ペリステファノン』第一〇歌では、カイサレイアの

キユプリアヌスが父なる神に向けた弁舌により、聖靈
が人々の心に働きかけ魂にキリストを渴望させ、異教祭
儀を拒絶させ殉教に進ませる。弁舌とは、キリストに清
められた魂の叫びであり、他の人間の魂のみならずキリ
ストをも動かすのである。肉体の中に捕らわれている魂
とキリストを繋ぐ働きをするのである。

助祭であり、アンティオケイアで四世紀初頭に殉教したと伝えられるロマヌスが取り上げられている。全編一四〇行の半分以上が、迫害者に対するロマヌスの言葉で構成されている。ロマヌスの弁舌の記録とも言えるであろう。ロマヌス以外には、殉教を遂げる幼子とその母が登場する。幼子は簡潔な言葉でキリストを証し、母は幼子に殉教を命ずる弁舌を揮う。殉教者は迫害者の罵りと拷問を受け、弁舌を展開させる以外は何もなさないのである。

ローマ官憲の迫害が起こり（四一～五〇行）、ロマヌスは教会の指導者として狼狽する信徒らの魂を励まし強める（五一～五五行）。すると信徒は一丸となり、信仰を守り喜んで死ぬ決心をし、兵卒に喉を差し出し毅然として殉教を遂げようとする（五六～六五行）。ロマヌスは、キュプリアヌスと同様に信徒を殉教に駆り立てている。ローマ官憲はロマヌスを首謀者とみなして捕らえ、裁こうとする（六六～六八行）が、ロマヌスは（殉教の）栄冠を熱望し、自ら進んで捕らえられ法廷に突入する（六八～七五行）。七六行以降では、ロマヌスは迫害者の罵りと拷問を契機にして、以下のように弁舌を揮うのである。「キリストの高貴な教えが人間を氣高くす

る。」（一二五行）「（神の）名を見事に告白する証人に／鉄と火の刻んだ傷が印をつけ／輝かしい死が苦痛の力を従えるならば」（一二三～一三五行）「新たな誉が加わる。」（一三一行）と述べている。つまり、キリストの教えを受入れ殉教を遂げる者こそが高められると主張しているのである。一方、異教の神話及び祭儀を描出し（一四六～三〇五行）、異教を信奉する教養人の創造者への無知を厳しく批判する。

博識な教養人であるあなた方が

吟味された生活規則に導かれながらも
神的な事柄と人間的な事柄が

よつてたつ定めがいかなるものかを、いかなる神の威容が

万物を創造し、全被造物を悉く支配するのかを知らないとは驚きだ。

（三〇六～三一〇行）⁽¹⁵⁾

教養人はキリストの教えを拒むことにより、魂を頽落させ、蒙昧、狂気に身を委ねるに至るとロマヌスは主張している。

この教えに敵対し、（この教えを）禁ずる者は皆
善良に生き聖性（徳）を目指すことを禁じ

魂の力を天に向かわせることを禁じ

私たちの炎（知性）の矛先を地に向けさせ

思慮の力を目覚めさせないのだ。

ああ、泥に埋もれた異教徒どもの（魂の）蒙昧

ああ、諸民族の肉欲に塗れた心

ああ、鈍重な誤謬、ああ、暗愚な民族

地に親しみ屍に身を捧げ

常に地上のものを見つめ決して天を仰がない。

狂氣の極み、錯乱の極致ではないか。

神々が婚姻で生み出されたと思い込み

靈的な（神聖な）ものを地に求めようとして

世界の諸元素を祭壇に祀り

被造物を創造者と信ずるとは。

（三六六一～三八〇行）⁽¹⁶⁾

教養人の狂態とは対照的なキリスト教徒の魂の様態は、以下のように示されている。父と一つで創造者である言葉（キリスト）が（三一一～三二五行）、人間の魂に神殿を築き（三四一～三五〇行）、その入口を信仰という

乙女が守り、キリストと父への輝く純粹な捧げ物を要求する。捧げ物とは「慎み深い顔立ち、無垢な心／平和な憩い、純潔／神への畏れ、知識の則／節度ある断食／決して潰えぬ希望、常に寛大な手」（三五六一～三六〇行）である。キリストにより異教の狂氣から解放された魂には、純潔、知識が捧げ物として要求されているのである。しかし可能であろうか。異教に基づく古典古代的教養への批判的弁舌が、魂のキリストへの捧げ物となるのであろうか。依然としてロマヌスの魂は、異教徒に囲まれ拷問を受け、異教祭儀を強制されている肉体の中にあるのである。ロマヌスは拷問を受け肉体を切り裂かれ（四五一～四五五行）以下のように肉体について論じ続ける（四五九一～五四五行）ようになるのである。

「魂はキリストに従うならば、父の榮光に入る。／キリストから離れるならば、地獄に渡される」（四七四一～四七五行）。いずれにせよ、魂が受ける報いは永遠であるから、「肉体がどのように滅びるかには、私は関心がない。／肉体は滅びるものだから」（四七八一～四七九行）。拷問による苦痛は、病気及び手術の際の苦痛と同じである（四八一～五〇五行）。外科医は「腐敗した四肢を切除するように見えるが／生命体の内部を癒すのだ」（五

○四一五〇五行)と述べ、ロマヌスは「罪業」(五一五
行)に突進する肉の本性を説き示すのである。

である。

○四一五〇五行)と述べ、ロマヌスは「罪業」(五一五
行)に突進する肉の本性を説き示すのである。

どんなに酷いか、知らない者があるだろうか

汚れて朽ちた肉の腐敗が。

不淨で、腫れ、崩れ、臭い、痛み

怒りで膨れ、欲望で滅び

しばしば胆汁で染まり紫班を帯びるのだ。

山と積まれた黄金は肉には必要ないのか。

飾り立てた衣服、宝石、絹、紫衣を

肉のために手練手管で求め

食い道楽は肉脂を好み

肉の快楽はあらゆる罪業へと突進する。

(五〇六一五一五行)¹⁷

肉とは、腐敗と罪業の源であり「……奴隸の肉も、元
老院議員の肉も」(五一四行)「墓の奥底に埋められて」
「朽ち」(五一五行)る。しかし「魂は天に戻され飛び上
がり／父なる神の光を豊かに受け」(五三三一五三四行)

「キリストが治める王宮に立つ」(五三五行)とロマヌス
は述べ、魂の肉からの解放を渴望し、次のように叫ぶの

ブルデンティウス『ペリステファノン』における弁舌について

罪の源を切断し除去してくれ。

脆い肉のために起くる苦痛を悉く切り取り

魂を解放し生き延びさせてくれ。

迫害者が切斷しようとをするものを、もう(魂に)¹⁸纏
わせないでくれ。
(五一六一五一〇行)

さらに訴えは激烈になる。「肉体を、墓に葬られるも
のを手放せ。／来るべき栄光に向かえ、神に至れ。／お
まえの本性を弁え、世界に、この世に打ち勝て！」(五
四三一五四五行)。そしてロマヌスは頬から顎まで引き
裂かれる。すると傷口もキリストと父を讃美する(五四
六一五七〇行)のである。迫害者は、キリストの新奇な
教えがロマヌスの心を狂わせ、全身を無感覚にしている
(五八一一五八三行)と断定する。するとロマヌスは、
キリストの働きを語り出す。弁舌と拷問によりキリスト
の生死が描き出されるようになるのである。

子は(死すべき)人間に見られるために現れた。
不死が死すべき肉体を取つた。

永遠の神が、滅ぶべきもの（肉体）を着たのだ。

私たちの肉体を天に上らせうるように。

人は死に、神は蘇つた。

死は肢体を纏つた神と争つた。

（死は）私たちの肢体を襲いながら、不死なるものに屈したのだ。 (六〇一~六〇六行)¹⁹

だから私たちは信ずる、肉体も滅びないと。

墓に呑み込まれるように捨てられるが。

キリストは、十字架上で自身の中で死んだ肉体を自身と共に蘇らせ、父（なる神）の玉座へと運び全ての者に蘇りへの道を与えたからだ。この十字架は私たちのものだ。私たちは拷問台に上るのだ。

私たちのためにキリストは死に、神なる

キリストは戻つて来られた。しかも、人としては死んだのだ。

二重の存在は死んで、死を征服し

死を知らぬものとなつた。 (六三六~六四五行)²⁰

これらの箇所でロマヌスは、受肉、十字架上の死、復

活というキリストの辿つた道を示し、これを人間に与えられた「蘇りの道」（六四〇行）であると述べている。さらに「拷問台」⁽²¹⁾をキリストの「十字架」（六四一行）と断定し、殉教者は「拷問台」を基盤にキリストの死を実践しキリストの死と復活の道を辿ると述べている。ロマヌスの弁舌は、キリストの「十字架」と「拷問台」を結びつけることで、人間の生死をキリストの生死に繋ぎ留めるのである。

六四六行以下では、キリストによる「救いの神秘と希望の進展」（六四六行）という問題に議論が及んでいる。ロマヌスは幼子にキリストの証人として語らせようとしている。幼子は「思ったことをそのまま／率直に飾らずに」（六五三~六五四行）述べ、「依怙蟲賊がなく、誰のことも憎まず／邪念に陥ることもない」（六六七~六六八行）という理由からである。迫害者が連れて来た「乳離れして間もない子」（六六三行）にロマヌスは以下のよう問い合わせている。

ロマヌスは、乳を飲む口の無垢な天性を試そうと意気込んでこう言つた。「坊や、ほんとうだ、と

その通りだ、と思うことは何か？」

キリストだけが、キリストのお父様が大切なのか。

それともいろんな姿の神々にお願いするのか。」

幼子はにつこりし躊躇わずに答えた。

「皆が神だと言つてゐるものは、どんなものでも

一つでなければいけないよ。一つだと大切になるよ。

キリストがそうならほんとの神様だよ。

子供だって、神様がたくさんだなんて思わないよ。」

……（中略）……

「誰なのだ、こんなことを言わせたのは。」迫害者は

言つた。

子供は答えた。「お母さんだよ。お母さんには神様

が教えたんだ。

姿は見えないけど、お父さんなんだよ。

小さかつたぼくに優しかつたよ。

ぼく、お母さんのおっぱいを一杯飲んだんだよ。」

（六六六一六八五行²²）

六六六行によると、「乳を飲む口の無垢な天性を」を

試すことが、ロマヌスの狙いである。幼子は、母の教え

を受け、父及びキリストを一つの神と信じている。幼子

自身の言葉を通して、罪に汚れぬ無垢な魂に信仰が確立

されていることが露になり、迫害者は激怒し、子を煽動する母への厳罰として、幼子に拷問を加え始める（六八六一六九五行）。瞬く間に鞭打たれ血塗れになる（六九

六一七〇五行）この子は、「拷問台」に、すなわちキリストの「十字架」に上つてことになる。この姿を見守る者たちは涙を流す（六六七一六六八行）。しかし母だけは異なる態度を示している。「嘆かずに／ひとり静かな喜びに面を輝かせていた」（七一一一七一二行）の

である。「敬虔な者の心には一層勇壮な信仰が立ち／キリストの愛により苦痛に靡かず／優しい気持ちを堅固にする」（七一三一七一五行）からである。心の中に、キリストの愛により確立された信仰が、母に子を「厳しい声で」（七一〇行）叱責させ、「喉が渴いた」（七一六行）と叫ぶ子に対して、「死にたじろぐとは恥を知りなさい」（七二一五行）と罵らせる。幼子の苦悶する姿にいささかも動搖せずに、母は以下のように、キリストが生ける泉であることを、雄弁に説き続ける。²³母の弁舌と、幼子の

苦悶を軸にキリストの存在が提示されていくのである。

水が飲みたいというが、おまえの傍らには
生ける泉があるので。永遠に湧き出し

生ける物全てを潤す唯一の泉が。

外でも内でも、魂をも肉体をも共に潤すのです。

水を飲む者に永遠の命を与えるのです。

おまえもすぐにこの流れに行き着きます。

魂や心が、キリストに謁えようとする

熱で燃えてさえいれば。一度たっぷり飲めば

胸の炎は静まります。

至福の生が渴きを覚えぬように。

(七二六一七三三行)²⁴⁾

母は、泉であるキリストへ導き、キリストへの愛を幼子の中に燃え上がらせようとしている。キリストは「魂をも肉体をも共に潤す」(七二九行)のであるから、有無を言わざずキリストを飲ませようとしているのである。母の弁舌は、キリストの愛を示し、キリストのもとに至るよう命令する。弁舌と苦悶は対になりながら、キリストの死の実践へと向かうのである。

さあ、わが子よ、この杯を飲み干しなさい。

ベツレヘムでは千人の幼子が飲んだのです。

(幼子たちの) 生は、乳を忘れ乳房を思わずには

すぐに甘くなる苦いコップで養われ
蜜となる血を飲み干したのです。

果敢な子よ、この規範を行ひなさい。

高貴な子よ、母の誇りよ。

父(なる神)はあらゆる年齢(の人々)を

勇猛にし例外を認めません。

泣き喚く赤子にも大勝利を許すのです。

(七三六一七四五行)²⁵⁾

この七三六行は、マタイによる福音書二〇章二二節に基づいている。キリストが弟子たちに十字架での刑死を予告した場面に続く箇所である。「この杯」とは、キリストが飲もうとしている杯、すわわち受難を意味する。

七三七行は、同福音書二章一六節に基づいている。ヘロデによる嬰児虐殺を単に凄惨な場面として捉えているのではない。嬰児らが、自らキリストの十字架に上つたとみなされている。母は、ここに救いと蘇りに至る殉教の規範を見出し、幼子に実践を要求するのである。さらに、イサクの奉獻(七四六一七五〇行)も取り上げるが、母はアブラハムがイサクを捧げたと解釈してはいない。イサク自ら「祭壇と剣に気がつき／お供えする老父に首を

差し出した」（七四九～七五〇行）と述べている。聖書中の出来事を自発的な殉教の規範として捉えている。さらに、マカバイ記七章の七兄弟の殉教の場面が取り上げられる。七兄弟の母親が子どもたちを「刑罰で酷たらしい最期を迎える／栄光の血を惜しぬように」（七五四～七五五行）励ましている姿が描き出されている。

他の部分も捧げられた先導者に従つた。」
このような勧めで、マカバイの七兄弟を母親は奮い立たせ
七度敵を打ち破り従えました。
子宝に恵まれ、誉高き母なのです。

(七六一～七七八行)²⁶⁾

頭髪も頭皮も額から

拷問吏が剥ぎ取つた。頭蓋は

首まで露となり見るも無残な有様だつた。

母は叫んだ。「耐え忍べ、栄冠が王冠の宝石でこの頭を覆うであろう。」

迫害者は他の子の舌を抜くよう

命じた。母は言う。「もう充分に

栄光を私たちは獲得した。さあ、私たちの

肉体の最上の部分を神にお捧げしよう。

忠実な舌は捧げ物となるに相応しい。

「魂の通訳者、思考の語り部

心の婢、隠された思いの使い

舌は、死の神秘への最初の捧げ物となり

全身の中で最初に贖うものとなつたのだ。

この箇所では、弁舌を行う器官である舌が神への捧げ物となることが示されている。魂の働きを伝達する舌は殺戮の対象とされ、最初に救いに与かる部位となつている。つまり舌は全身に先駆けて殉教を遂げたのである。八三六～八三七行では、母に先立ち幼子が従容として斬首され死亡する。母は幼子に次のように語つてているのである。

死刑執行人が幼子を求めると母は差し出した。

涙して躊躇することはなかつた。接吻を

一度して、こう言つた。「さようなら、愛しい子よ。

祝福されたおまえがキリストの王国に入つたなら
母を思い起こしておくれ、子ではなく守護者なのだ
から。」
(八三一～八三五行)²⁷⁾

さらに母は讃歌を唱する。「貴きかな、神の眼差しのもと、聖なる者の死は。／これはあなたの僕、あなたの婢の子」（八三九一八四〇行）。そして、幼子の血塗れの頭蓋を胸に戴く（八四一一八四五行）。母から励ましを受けた幼子は、殉教を遂げると母の守護者となるのである。

幼子に続いて、ロマヌスの舌が犠牲となる。拷問に屈せぬロマヌスの「迸る弁舌に」（九一五行）震え上がつた迫害者は、医師に舌を切断させるのである。

こう語ると母はマントを広げ

叩かれ血塗れになりながら手を伸ばした。

湧き出る血潮と痙攣する頭蓋を

掴もうとしていた。

頭を受け止め優しい胸に埋めた。

（八四一一八四五行）²⁹

そして、口から舌を引っ張り出して
咽喉までメスを差し込む。

医師は筋を一本一本切断する。しかし殉教者は少しも噛みつかない。歯を合わせ

口を閉じることも、血を啜ることもない。

動かず口を開いたまま

立ち続けた。血が流れ出て溢れ

麗しい殉教者は頸を朱の花飾りで染め

美しい血塗れの胸を眺め

王の如き紫衣を楽しむ。

（九〇一一九一〇行）²⁸

舌を切斷され殉教者は流血により胸を朱に染めた。この記述は、以下の幼子殉教の場面を想起させる。

いずれの場合も、神への捧げ物から流れ出た血が胸を染めている。幼子が、弁舌を揮う母に先立ち殉教し母の守護者となるように、ロマヌスの舌も、身体の中で最初に殉教し弁舌を贖いとつたのである。舌を失った後にもロマヌスは、次のように迫害者に弁舌を揮い続ける。

ロマヌスは心深く、長く息をして
呻きながら反論し始めた。

「キリストを語る者に舌が欠けはしなかつた。

言葉はどの器官によつて支配されるのかと問う必要はない。

言葉を与える方が讀えられるのだから。

(九二六一九三〇行)³⁰

キリストを語る弁舌は、創造者であり言葉を与えるキリストを讚える行為となる。弁舌も、发声もキリストが支配するのであるから、舌の有無は関わりがないことになる。

この方がなさるのだ。肺腑から絞り出された

声の勢力は曲がった腔拱を通り

そら、口蓋が音を弾き出し

ほら、歯の弦で調整される。

舌は動く撥の役割を果たす。

この方が咽喉の共鳴する諸導管に

一息で一緒に響くよう命ずると

通路で言葉を発音し

出口でシンバルを使つて話すのだ。

唇が控え目に閉じ或いは開くのだ。

(九三一一九四〇行)³¹

私たちの神の力を知りたいのか。

流れる海の波を足で踏みつけると

(水は)流れ揺らぐ性だが固く集まる。

直接、創造者を語るのではなく、发声器官の構造と運

ブルデンティウス『ペリステファン』における弁舌について

動の細かな描写により、創造者のなす業である自然の複雑な仕組みを提示する。この行為も讚美とみなされてい

るのである。自然の仕組みの複雑さ、微妙さを明かにすれば、それを改変するキリストの偉大さが一層明らかになるからである。

自然の仕組みの可変性を疑うのか

原初の状態は造られたのだ。

創造者は思うが儘に変えることができる。

自身で法を定め編み直す。

弁舌が舌の援助を必要とはしないように。

(九四一一九四五行)³²

創造者であるキリストは自然を全て支配する。ならば、舌なき弁舌を可能にしたのもキリストなのである。水の凝固と同様に、創造状態及び自然法則に反する奇跡をキリストが起こしたと考えられているのである。

創造された時の定めと、何と異なるのか。

(九四六一九六七行)⁽³³⁾

普通は泳がせるのだが、(今は)足跡を支えている。

この位はいつもの事だ
キリストと子において、私たちが崇める眞の神性には。

口のきけない人々に弁舌を、足の悪い人々に歩みを
耳の聞こえない人々に聞くことを楽しませ
目の見えない人々にいつも違う日光を与える。

これらを狂人の作り話だと思うなら

おまえが信するに値しないと

今まで考えていたのなら、さあ、眞実であると認め
よ。

おまえに舌を切り取られた者が喋っているのだ。
立証された奇跡に屈するがよい。」

戦慄が茫然とする迫害者を襲い
恐怖と憤怒が心を闇に沈めた。

自分が起きているのか、夢見ているのかわからない。

いかなる兆しかと、困惑し驚くのだ。

恐怖が打ち碎き、憤激が駆り立てる。

荒れ狂う魂の力を抑えられず

激怒の武器を向ける場所が見つからない。

キリストの行う奇跡とみなされ、その存在自体が説得力を發揮する弁舌は、描写、論理を開させ迫害者を窮地に追い込んだのである。古典古代的教養に耽溺し、悪徳に塗れたものとみなされかねない弁舌が、キリストの讃美を行い異教を論破する無比の活動として位置づけられている。

さらにロマヌスは、犠牲の血に塗れる神官の姿と、異教徒が肢体を切断し、あるいは焼いて神々に捧げる姿を執拗に描き出す(一〇〇六一ー〇九〇行)。そして、異教徒の敗北を宣告し(一〇九一ー一〇〇行)、首を折られ「……苦難は終わり／魂は鎖から解かれ天に向かう」(一一〇九一ー一一〇行)のである。この過程において、贖われた弁舌は異教論駁を通して自己の立場を一層明確にするのである。

私たちの血は残忍なおまえが流したのだ。

不信で暴虐なおまえが

無実な者の身体を痛めつけるのだ。

おまえが手を出さなければ、私たちは血を流さずに

生きるのだ。

たとえ血塗れになつて刑罰を受けても、私たちは勝利する。

しかしもう私は沈黙する。定めの時期が迫つている。

苦しみの終わり、苦難（殉教）の栄光だ。

凶暴な者よ、もう今までのよう

私たちの肉を拷問し裂くことはできないのだ。

（一〇九一～一〇九九行）³⁴

うねあいが、どれほどの傷を耕したかを
(傷が) どんなに深くとも、広くとも、浅くとも、
長くとも、短くとも

苦痛の激しさも、切斷の程度も。

天使は血一滴をも漏らさない。（一一二一～一一三〇行）³⁵

殉教者は弁舌を用いて、自分が傷と血を好む異教徒の暴虐性の犠牲となつたことを明確にしている。一〇九六行以下によると、「定めの時期」（死）になると、拷問も傷も血も弁舌もやむのである。つまり「苦しみの終わり、殉教の栄光」が訪れるのである。ここでは、弁舌、傷、血はいずれも殉教者の耐えた苦難と見なされている。さらに一二二一行以下の記述を見てみよう。天使は殉教者の言行のみならず、傷及び血をも余さず描き取り、不滅の記録を作成するのである。それを永遠の審判者が再読し、苦難の重さと報酬の量を釣り合わせ（一一三一～一三五行）裁きを行うのである。

天使は神前に立ち

殉教者の言葉と耐え忍んだ苦難を受け取つた。
弁じた言葉だけを記録したのではなかつた。

傷をそのまま描き筆で記した

脇腹、頬、心臓、喉、いずれの傷をも。

全出血量が記された。

の代価である苦難としての地位をも獲得したのである。

第一〇歌冒頭でプルデンティウスは、弁舌を揮おうとする自身の姿を次のように描いている。

私の言葉は麻痺した舌に絡み
吃り調子外れに悶える。

福音書記者は書いた、救い主³⁵自身が使徒たちに教えをお与えになつたと。

「私への信仰を告げねばならぬ時には
予め言葉を探すな。私が備えなき者たちに語るべきことを吹き込むであろう。」

私は口がきけない。しかし能弁な

私の舌、キリストがはつきり語るであろう。

(一六一—二二行)³⁶

弁舌は、キリストに向かい、キリストにより行われ、キリストの死に倣うものとされ、キリストの働きを示す存在となつたのである。

おわりに

『ペリステファノン』の記述に基づき、司教キュプリ

アヌス、助祭ロマヌス、幼子の母、以上三者の弁舌を検討した。プルデンティウスにおける弁舌の位置づけとは、おおよそ以下のようになつてていると言いうるであろう。キリストが魂を悪徳の支配から解放することにより、弁舌が展開する。その目的は、キリストの働きによる魂の変容という事態を、他の魂にも生起させることである。

魂がキリストへ向かう殉教という過程において、弁舌の活動は一段と高まる。弁舌は、キリストと結ばれることを渴望する魂の存在を示し、拷問を受ける肉体及び魂と不可分な状態の中で、キリストの死を説きつつ、キリストの死の実践へと向かうのである。殉教者においては苦難と弁舌が一体となつてゐる。殉教の過程を通じて、弁舌はキリストに関わる三つの位置づけ（讃美、奇跡、苦難）を与えられたのである。

かれの生涯の軌跡を示す『序 Praefatio』を見ると、死が迫る齢に達したプルデンティウスは、自分が何か有益なことをなしてきたのかと自問（四一六行）し、生涯を振り返つてゐる。行政官として榮達の道を辿り、皇帝側近の高官となる（一六一—二二行）が、死が全てを無に帰することに気づいた（三〇行）のである。

幼年時代は音を立てる鞭に

涙を流し、長ずるに及んで私は

悪徳に染まり偽りを語ることを教えられた。罪の中

だつた。

そして、不埒な傲慢と

厚顔な放縫が、ああ、恥ずかしく、悔やまれる！

青春時代を悪癖の腐敗と汚辱で台無しにしたのだ。

さらに論争が荒れ狂う魂を

武装させるが、論駁を望んでやまぬ強情は

手痛い敗北に屈してしまつた。

(七一五行)³⁷

往来で裸行者を見せて回り
偶像崇拜者は煙まみれの石に蠟を塗り

蒼白な信心は、聞く耳持たぬ祠に身を投げ出す。

(三九五一四〇五行)³⁹

立身出世を目指にして、修辞学及び弁論術の習得に励んだ日々を「悪徳」に染まつた詭弁の生として、批判していると言つてよいであろう。傲慢、放縫といった悪徳が腐敗と汚辱に塗れさせ、魂は、狂気に囚われていたというのである。この惨状をプルデンティウスは『ハマルティゲニア』³⁸で次のように述べている。

憤怒、迷信、悲哀、不和、悲嘆
血への激しい渴き、酒への渴き、黄金への渴き

嫉妬、姦淫、狡猾、誹謗、窃盜。

凄まじい形相で恐喝する有り様である。

野心は虚しく膨れ、知識は高慢になり

弁舌は声を上げ、欺瞞は密かに悪巧みをする。

こちらでは、喧しい雄弁が広場中で吠えまくり

あちらでは、詰まらぬ哲学がヘラクレスの棍棒を持ち

「知識」は「野心」と、「弁舌」は「欺瞞」と同列の働きをなしている。つまり「知識」及び「弁舌」は悪徳に加勢するのである。「雄弁」は無節操に吠え、「哲学」は卑しい奇行に走る。「偶像崇拜者」は異様な参拝をし、「信心」は無益な神に身を捧げる。古典古代的教養の諸要素も異教徒の信仰心も自滅的行動を展開する。頽落した魂と共に、教養も異教も零落するのである。しかしブルデンティウスは『序』において、堕落した生との訣別を宣言している。

しかし最期の時に

罪人である魂は愚かさを脱ぎ捨てる。

善行を捧げることができないなら、せめて声で神を讃えよう。

来る日も来る日も讃美して

主を歌わぬ夜はない。

異端と戦い、公の信仰を広め
異教徒の祭儀を踏みつけ

ローマよ、おまえの偶像を滅ぼし

殉教者に讃歌を捧げ、使徒を讃えねばならない。

こう記し語る間にも

ああ、肉体の鎖から解き放れ飛び立てるのなら。
働き続ける舌が、最期の響きをもつて日指すところ

へ！

(二二四～四五)⁽⁴⁰⁾

註

(1) アンリ・イレネ・マル一著、横尾壮英他訳『古代教育文化史』二二八一～二二八五頁を覗よ。

(2) I. Hilberg, *Sancti Eusebii Hieronymi Epistulae*, pars I, Vindobonae-Lipsiae, 1910. (= CSEL 54) p.702.

(3) *Ibid.*, p.189.

ブルデンティウスは余生を神の讃美の生とするのである。魂(二二五行)は、自らが「神に属」しており、今まで自身が「熱望していたもの」は「神のものではない」(二二三行)ことを知り、生を転換するのである。讃美の生で中心となるのは「愚かさを脱ぎ捨て」た魂と「働き続ける舌」である。悪徳に塗っていたブルデンティウス

の舌が新たな活動を展開するのである。『ハマルティゲニア』における魂の惨状も、『ペリストファノン』における救いを渴望する魂も犠牲となる舌も、単なる文学的創作ではない。『序』の末尾で示されているように、舌を働かせ続け、魂を神のもとに到達させようとするブルデンティウスの生に基礎を有するのである。

ブルデンティウスにおいて、古典古代的教養に基づく弁舌は、キリストの教えに触発されることにより、殉教者及びキリストの生死の実践形態として、その存在を保証された。言語の巨大な運用体系である古典古代的教養を、キリスト教徒がキリストを讃美するために、広範かつ徹底的に吸收する可能性が示唆されているのである。

(4) ラテン・キリスト教文学史におけるブルデンティウスの位置づけについては、まず、J. Fontaine, *Naissance de la poésie dans l'occident chrétien*, Paris, 1981. を参照すべしである。ブルデンティウスに関する邦語文献としては、

- 家入敏光著『初期キリスト教ラテン詩史研究』(創文社、一九七〇年)がある。ブルデンティウスの作品の翻訳としては、家入敏光訳『日々の贊歌・靈魂をめぐる職』(創文社、一九六七年)があり、訳者が付してある解説は極めて有益である。
- (5) 個々の作品の著作年代は確定されではおらず、様々な議論がなされている。筆者の今後の課題とした。
- (6) プルテティウスの諸作品の原典としてCCSLのテキストを使用した。
- M.P. Cunningham, *Anselii Prudentii Clementis Carmina*, Turnhout, 1966. (=CCSL 126)
- 行数は上品のテキストである。本文中に訳出した箇所について、テキストの諮詢欄を註に記す。以下同じ。
- (7) CCSL 126, p.382.
- (8) *Ibid.*, p.382.
- (9) *Ibid.*, pp.382-383.
- (10) *Ibid.*, p.383.
- (11) *Ibid.*, p.383.
- (12) M. Lavarenne, *Prudence*, IV, Paris, 1963. p.187. やはり「光」の語用は lumen である。註も解してある。
- (13) CCSL 126, pp.383-384.
- (14) *Ibid.*, p.384.
- (15) *Ibid.*, p.340.
- (16) *Ibid.*, pp.342-343.
- (17) *Ibid.*, p.347.
- (18) *Ibid.*, pp.347-348.
- (19) *Ibid.*, p.350.
- (20) *Ibid.*, p.352.
- (21) 「據置印」と訳された patibulum とは以てのもの の意味が證められる。第 1 は殉教者の上の拷問台、第 1 は聖なる十字架、第 1 は苦難である。A. Blaise, *Dictionnaire Latin-Français des Auteurs Chrétiens*, Turnhout, 1954. p.600, 899.
- (22) CCSL 126, p.353.
- (23) 『三才水火四時指掌圖』 四章 1 四節に基くもの。
- (24) CCSL 126, p.355.
- (25) *Ibid.*, p.355.
- (26) CCSL 126, p.356-357.
- (27) *Ibid.*, pp.358-359.
- (28) *Ibid.*, p.361.
- (29) *Ibid.*, p.359.
- (30) *Ibid.*, p.362.
- (31) *Ibid.*, p.362.
- (32) *Ibid.*, p.362.
- (33) *Ibid.*, pp.362-363.
- (34) *Ibid.*, pp.367-368.
- (35) *Ibid.*, pp.368-369.
- (36) *Ibid.*, pp.16-22.
- (37) *Ibid.*, p.1.
- (38) 九十六行に及ぶ教説詩である『ハマルティゲニア』におけるアルテティウスは神聖の神の存在を否定して

神は惡ではなく聖かつ善である」とを強調する。淒惨な魂の墮落状態を描きつつも、魂に神が与えた優れた資質と善惡を選択する自由を認めている。

- (39) CCSL 126, p.130.
(40) *Ibid.*, p.2.